

## 「信貴山縁起絵巻」三巻の叙述の論理—仙人・仙境としての命蓮・尼公・信貴山—

亀井 若菜(滋賀県立大学)

「信貴山縁起絵巻」は12世紀作とされる三巻の絵巻であり、上巻・中巻には聖である命蓮が、下巻にはその姉の尼公が登場する。尼公は命蓮に再会すべく信濃から旅をし、東大寺の大仏殿で祈りを捧げた後、信貴山に至り、山上の僧房で命蓮と再会し共に暮らす。中世においては、東大寺大仏殿内を含め山岳寺院においても女人禁制をとる寺が多くあった。そのため、尼公の表現は当時の現実からは逸脱していると言える。そのことを最初に指摘したのは阿部泰郎氏であった。発表者も2007年の論文で、尼公が男性宗教者に近い姿で表象されていること、そのような尼公が線描のみの姿で紫雲棚引く信貴山へ到達する様子が、女性には困難とされた往生とも重ねて表現されていることを推論した。本発表においては上巻・中巻をも含め、この絵巻三巻が何を見せようとしているのかを考察する。

はじめに、命蓮が仙人のように、尼公も仙人の図像と類似する形で表現されていることを指摘する。命蓮を仙人と捉えるのは、類似する他の飛鉢譚で飛鉢を行うのが多くの場合仙人であること、命蓮が現世における何らかの立場を規定されるようには表現されていないこと等による。神仙の伝を集めた『本朝神仙伝』(12世紀初頃)に登場する仙人達も、身分・位階・宗派・地域等を限定されず長生不死という性質や飛鉢などの験力を持つことによって仙人とされている。一方、杖をついて歩く尼公の老躯の姿も、仙人である婆藪仙像や役行者像と類似する。その尼公が、線描のみの姿で信貴山の紫雲の中に消えて行くように表現されるのも、『今昔物語集』等に記される現身往生に近いように見える。現身往生も、遺体を後に残さない(不死を暗示する)点で仙人の特性とされていた。

そして絵巻の最後には、再会した命蓮と尼公が信貴山上で円満に暮らす様子が描かれる。しかし当時は男性僧侶と女性が寺でともに暮らすのは困難なことであった。そのためか、生き別れになる僧と母が極楽浄土での再会を期した叙述や(『成尋阿闍梨母集』等)、久米仙人と妻が、死んだ後に蘇生し仏土で共に暮らす話もある(『和州久米寺流記』)。浄土であれば、仙人であれば、そのようなことが可能になると考えられていたことが窺える。

以上のことからこの絵巻は、命蓮と尼公を仙人の如く、信貴山上を浄土や仙境であるかの如く表象することで、ジェンダー規範を含む現世の規範をのがれる世界観を見せるものであると解釈した。命蓮の飛鉢の様や、図像として他に類例のない剣の護法の飛行の様が巧みに表現されるのも、仙人のような命蓮の起こす非現実的な不思議を肯定的、積極的に見せるためであり、内裏や東大寺もその権威を見せるためではなく、命蓮や尼公の行為を保証するために登場するのだと考える。規範を逸脱するものや神仙への関心は、『本朝神仙伝』を著した大江匡房などに認められる。絵巻と神仙をめぐる思想との関係も指摘したい。